

論

壇

日中国交樹立二十周年を迎え  
た。いささかの感慨を禁じ得な  
いけれど、注目天皇訪中も間  
近に迫っているというのに、こ  
のところ中国という巨大な対象  
が、次第に視界から遠ざかって  
極小化してゆく幻影に思われる  
ことがある。それはなぜだろう  
か。

たしかに、この二十年間をふ  
りかえてみると、日中間の諸  
関係は緊密化し、中国が日本人  
の日常に様々なかたちでつなが  
ってきている。身近な事例で恐  
縮だが、私のゼミナール(大学  
院)には中国からの留学生があ  
ふれ、日本人学生よりも、ずっ  
と人数が多い。にもかかわら



中嶋 嶺雄

ず、中国を研究する私自身、国  
交正常化以前の中国と今日の中  
国を比較して、どちらの中国の  
方がより近い存在なのかと問う  
てみると、どうも私には明確な  
答えを出す自信がない。最近の  
中国については、以前よりもわ

# 国交樹立二十年の中国像

はや不可逆的なものであって、  
それは中国共産党の一元独裁体  
制が内側から、また周辺から刻  
一刻と変質しつつあることでも  
あり、いずれポスト鄧小平時代

には、大きな政治的変動があり  
得るだろうこと、そのことがわ  
からないわけでは決していない。  
その中国の内側では、国民のあ  
いだに急激に広まっている功利  
主義と拝金思想が中国指導者層  
という歴史的潮流のなかで、二十  
一世紀にも保持されるとはとう  
てい思われないことも、ほほ予  
測できる。

からないことの方が多くなっ  
てきているような気もする。この  
不可解さにもかかわらず、やれ  
華南経済圏だ、日中経済協力だ  
のという言葉が飛び交っている  
けれど、ますます不可視の巨獣  
のようにも見える中国につい  
て、私たちはもっと視距離を置  
いた方がよいのではなからう  
か。

しかし、その中国が天皇訪中  
をあれほど熱心に要請する一方  
で、大幅な財政赤字にもかかわ  
らず軍事予算を年々増大させ、  
脱冷戦後のアジアの真空を埋め  
ようとしている動きの根源など  
については、どう見ても不可解

体的危機感を刺激して政治  
的締めつけをさらに強化しつつ  
ある半面、党官僚層自身が頼っ  
て腐敗の連鎖反応に連なってい  
るといふ社会的矛盾について  
も、わからないわけではない。

外部世界にはこれほど多元的  
な価値観が共存し、自由があふ  
れているというのに、民意や思  
想・言論の自由が軍事力や公安

このような中国を、わが国は  
依然として日中二国間の友好関  
係という枠組みだけで見ようと  
しているのにはたいして、西側諸  
国、とくにアメリカは、中国理  
解派のブッシュ大統領でさえ、  
大きな政策転換をしようしてい  
る。台湾へのF16戦闘機売却の

もつとも、今日の中国が進め  
ている改革・開放の路線は、も

警察の暴力によって抑圧され  
るといふ体制が、脱社会主義と

なのである。結局、天安門事件  
をもたらした中国内政の体質が  
対外的にも反映しているのであ  
ろうか。

そうしたなかで「民主」や  
「人権」や「環境」などの問題  
は、いまや決して一国の内政問  
題ではなく、まさに「国境を超  
える義務」(スタンレイ・ホフ  
マン)なのだという認識を獲得  
することこそ、今後の日中関係  
にもっとも必要な課題だと私は  
考えている。

(東京外国語大学教授、現  
代中国学・国際関係論)